第 30 号
発　行
筑波山がまの油売り口上研究会

# がま研「かわら版」第30号発行に寄せて

会　長　　林　正一

がま研「かわら版」は、お陰さまで本号をもちまして創刊三十号を迎えることが出来ました。これもひとえに「かわら版」をご愛読いただいております皆様方のご支援・ご協力の賜ものと心から感謝申し上げます。

振り返ってみますと、筑波山がまの油売り口上研究会（通称「がま研」）は、平成十二年四月二日に、新治村立（現・土浦市立）小町の館において設立総会を開催し、早いもので十五年が経過いたしました。

この間、会員相互の意思の疎通を図るため、各種行事の体験談や情報提供・事業報告などを中心に、毎年二回「かわら版」を発行してまいりました。

原稿の提供につきましては、会員の方々に多大なるご協力をいただき、年々充実した内容の「かわら版」を発行することが出来ました。また、本会のホームページにも掲載するなど、広く多くの皆さんにも好評を博しております。これも、長年に亘り編集を担当していただいております編集子こと田神さんのお力添えのお陰と感謝いたしております。

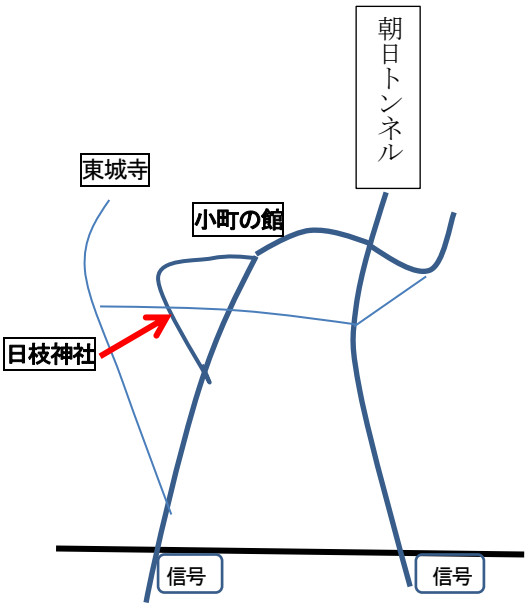
今後も、筑波山を中心に活動しているもう一つの団体『筑波山ガマロ上保存会』の皆さんとも良い関係を保ちながら、互いに切磋琢磨し合い、さらなる技術の向上を図ると共に、筑波山麓周辺はもとより本県を訪れた観光客へのおもてなしと観光ＰＲに、少しでもお役に立てればと考えております。

ひいては、平成二十六年度『全国地域ブランド調査』で、観光意欲度が二年連続で最下位となってしまった茨城県のイメージアップに、少しでも貢献できれば幸いと存じます。

そのために二十七年度も引き続き、口上の理解をより深めるため、筑波山周辺の歴史や自然を学びながら、その魅力を再発見していくほか、観光ＰＲへの協力や東北復興支援・福祉施設の慰問などボランティア活動を推進するため、より一層努力してまいりたいと考えております。

結びに、今後とも本会の運営にあたりまして、会員皆様方のご支援・ご協力をお願い申し上げまして、創刊三十号という節目に当たっての挨拶とさせていただきます。

我らが林会長の雄姿




## 新緑の筑波路めぐり（小野小町の里コース）

日　時：５月３１日（日）　９：３０集合
　　小雨決行・荒天中止
集　合：日枝神社（流鏑馬で有名）
　　土浦市小野１２６－７（ナビ入力用）
案内人：井坂　敦實　氏　(郷土史家)
コース：　日枝神社⇒東城寺⇒小町の墓⇒小町腰掛石⇒
　　小町の館(昼食)⇒向上庵⇒清滝観音
持ち物：弁当、飲み物、タオル、帽子、歩きやすい服装
　　※小町の館内に「そば処小町庵」もあります。
申込み：５月２３日(土)までに練習会支部代表者
　　または　林会長(TEL０２９－８６７－３６２９)まで

**ご家族・ご友人と気軽にご参加ください。**

# がまの油売り口上講座に出席して

石　川　隆　俊

**平成二十六年の講座に参加された石川隆俊氏は、ユニークで魅力的な生き方をされてきた大先生です。衰えることのない好奇心をエネルギーとして、東京から皆勤で「がまの油売り口上講座」を修了された記念に、寄稿していただきました。文末に略歴と著書についても簡単にご紹介しました。**

このたび土浦市の小町の館にて、四回に分けて行われた「がまの油売り口上講座」に参加する機会を頂きました。実に楽しい有意義な経験でありましたので、感想を述べさせていただきます。

講座の開催された小町の館は、美しい静かな田園風景に囲まれた土浦市の自然公園の中にあります。本講座の主催者である林正一会長は土浦市にお勤めで、この会館の館長もなされ、ご当地の文化財保護の専門家であられます。また佐藤貞弘事務局長は、つくば市にある国土地理院に奉職され、がまの油売り口上を全国に広く伝えることで、この地を知ってもらおうという郷土愛に燃えておられます。四回の講座はお二人が交互に担当され、大道芸「がまの油売り口上」を見事に伝授されました。それだけではありません。がまの油に関する歴史、伝説、その成分の薬理作用など詳しく伝授されました。私も医学の分野におりますので、興味をもって伺いました。がまの油の原料は古来センソとよばれる成分で、現在は中国のシナヒキガエルから採取され、固形物として輸入されているとのことです。現在、筑波山の土産店などで市販されている陣中油の中には、この成分は含有されていないとのことです。

さて、用意いただいた「がまの油売り口上」の手本を拝見して、実によく練られた文章と感心しました。幾つかのバージョンがあるようですが、使われた教科書は風格ある江戸言葉で書かれ、講釈師や平賀源内も手を入れたとか、ユーモアもありよくできております。

私が今回この講座に参加したのは、一つの偶然からでした。茨城県フラワーパークで、たまたま研究会のお一人による口上の披露があり、それを拝見したのが縁でした。私は小学三年の孫を連れて、東京から車で出かけました。はじめ傍聴だけの積りでしたが、子供でも参加が出来るとのこと。お許しをいただき、以降一緒に聴講いたしました。最終回には、家族全員で筑波神社直下の江戸屋に泊まり、口上のリハーサル、神社に参詣しました。

今回の口上講座への参加は、当初単なる好奇心からでありました。毎回三十人ほどの仲間が熱心に聴講、それぞれの思いを持っての参加と思われましたが、私は七十五歳の高齢に達しておりますので、自らの認知症の診断と予防に目標を定めました。まず原稿を読んで暗唱しようとしました。しかしなかなか正確に覚えるのは難しいのです。小学生の孫の方が、かえって先に覚えてしまいました。

もう一つ「がまの油売り口上」は、学校の教材としても格好のものと思いました。みんなの前で堂々と発表する良い練習になるだけでなく、同時に江戸言葉を覚えることもできます。

口上研究会の皆様が、がまの口上を通じて、単なる大道芸の披露をこえて、古き伝統を楽しみ、友情の輪を広げている姿をみて共感を覚えた次第です。今後貴研究会の益々の発展を祈念いたします。

（略　歴）

1939 年　東京・福生市に生まれ
1968 年　東京大学医学部卒業
1969 年　関東逓信病院病理部
1975 年　東大医学博士号
1984 年　癌研実験病理部長
1989 年　東京大学医学部教授
1997 年　東京大学医学部長
2000 年　東大退官、名誉教授
2002 年　米国・メリーランド大学医学部客員教授就任と同時に
　　(ジョンズ・ホプキンス大学)ヴァイオリン科に学ぶ
2008 年　公益財団法人喫煙科学研究財団理事長

### *ライフワーク・著書など*

魚などの黒こげ物質、ディーゼル排気成分の発がん性を証明。「DNA 修復と発がん」では、修復遺伝子を導入したマウスを世界に先駆けて樹立、発がんへの関与を明らかにした。食の研究では、発芽玄米、ごまなどに含まれる IP6 やセサミンのがん予防など、その業績は世界の主要科学ジャーナル誌上に数多く発表されている。

現在も少年の頃の好奇心を持ち続け、関心の主軸を体から心のテーマに移し、性の問題を含め、熟年での生きがいと意欲、音楽と脳科学などの研究に携わっている。

「性は生殖年齢を過ぎれば動物では無用と思っていましたが、人ではどうなのかと考え直し、高齢者の調査を始めました。90 歳近くまで元気な人もいました。性は隠すものでなく、もっとおおらかでよい。人間の生きる喜びをあたえてくれます。」

## ～　ちょっと　ひといき　～

*救心の主成分センソは、簡単にいえば、ガマの油ということになります。1 匹あたり、わずか数十 mg くらいしか分泌液は採れず、乾燥後はほんの数mg にしかなりません。はじめ白色ですが、酸化して黒褐色になります。薬理作用についてはムツゴロウ先生の著書からご想像を！*

（生薬の話「せんそ」救心ホームページから）

ターラリ、タラリ、ガマの油は、徐々にしみ出してくるものと相場が決まっているようだ。油を分泌する皮脂腺は、耳のうしろに一対ある。後頭部に少し盛り上がった所があり、ポツポツと穴があいているところがそれである この皮脂腺は、常時働いているが、私の乏しい経験から推すと、生殖シーズンにもっとも分泌が盛んになるようである。もっとも恋の季節に粘液の分泌が盛んになるのは、動物一般の傾向ではあるが…。何故この粘液があるのか？それをカエルの生態に結びつけて結論を出した人はいない。有名なのは、人の薬として古くから使われてきたことである。しかし、それもガマの風貌から連想された薬効であり科学的な根拠は薄いようだ。人間という動物は、根は臆病なくせに、変わったもの、グロテスクなものをすぐに薬にして服用したがる。イモリの黒焼き、マムシ酒、皆このたぐいの薬である。ガマの油に発汗防止剤が含まれているのは確かだ。微妙な指先の感覚にたよるバイオリニストは、その昔、これを手に塗って演奏したといわれている。徹夜で観察を続けていた頃のこと。この背中から吹出す（ターラリ、タラリではない、どっと出てくる）白い粘液の誘惑に耐えきれなくなって、どっぷり指先につけてなめてみた。舌が曲がり、部屋を二、三度駆け回りたくなるほどの猛烈な苦さだった。しまったと思ったが、しぶい顔はできない。せっかくの珍味を一人占めしては造化の神に申し訳ないので、私は精いっぱいニッコリ笑うと、「うまい。こいつはいける」と舌なめずりをしてみせた。（中　略）　カエルの粘液は、苦かったが、不思議にからだがシャンとなり、元気が出てきた。後日、このエキスから強心剤が発見されたという報告を読んだが、さもありなんである。あの日、わたしだけが好調に徹夜を乗り切ったのは、崇高な探求心のたまものだったということになろうか。

【引用文献】　畑正憲　『われら動物みな兄弟』　角川書店 (1972 年)

# NHKのど自慢予選に出場！

予選出場さえままならない人気番組に…。

キンコンカンで始まるのど自慢は、昭和二十一年にラジオで、二十八年からテレビ放送が始まり、今年で七十年になる大変な長寿番組です。歌手への登竜門として、また素人がテレビに出られるということで「のど自慢」に出てみたいという人は多い。私もその一人で、小美玉市で開催されると聞き、早速、観覧と出場の両方に応募した。

一ヶ月後、NHKから予選出場の通知がきた。これも奇跡のようなものだ。さあそれからが大変、予選のみであれば気楽なものだが、それでは面白くない。出るからには、本番への合格である。合格するには、どうアピールすればよいか。考えても、考えても、良い案が浮かばない。歌のほうは、いくら頑張っても鐘二つ。とすれば、何か特異な出で立ちでやるしかない。そこで思いついたのが「がま」の格好はどうだろう。歌のほうは、既に応募の時、ゲストの三山ひろしさんの「酔待ち酒場」と決まっている。歌と格好が合わないがもうやむを得ない。本番に合格するには、歌も練習しなければならない。大勢の観客の前で歌うとなると不安、緊張もある。

そうこうしているうちに早いもので当日がやってきた。八月三十一日（土）予選会受付は、十時から。当日九時に会場に着いた時には、既に会場入り口に、二百人ほど行列を作っているのにびっくり。案内に出場者と告げると、受付会場に案内される。受付会場に入るとごった返していたが、五十番ごとにグループで受付をし、終わると本会場に移動。そこではもう席取りや衣装、出番の準備で右往左往。十一時頃になって、観客、千人以上がどっと入って、会場はみるみる一杯になる。応援団の横断幕やウチワ、光物など準備会場は熱気むんむん。私の応援団は、妻一人。寂しく会場の雰囲気を感じながら出番を待つ。

会場には、大型カメラが中央と左右に二台、後方左右に二台と本番さながら。イベントもいろいろあり、舞台裏見学ツアー、カメラマン体験、ためして合点コーナー、ロビーには、大型テレビ、ふれあい隊、グッズ、お菓子、お土産コーナーなどNHK一色となり、スタッフ二百人体制で支援するなど、全力投球で頑張っている様子を実感しました。

今日の司会は、水戸放送の渡辺アナ。若干の注意事項『録画、録音禁止、応援は出場者の出番のときのみ、他に迷惑を掛けない、マナーを守る』などの話があり、いよいよ十二時。一番の音楽が鳴り、歌い始める。五十秒ほど歌うと「有難うございました」と甲高い声が流れ音楽が終わる。次から次と、二百五十人が歌い終わったのが、四時三十分頃、それから一時間審査に入る。その間、カラオケ大会、三山さんの歌などあり、五時三十分頃になって審査結果発表となる。

はらはら、どきどき発表を待つも、二百十四番はとうとう呼ばれなかった。残念無念の涙を呑んで、会場を後にした。だが、自分としては、人生最初で最後の挑戦を全力で戦い、出場したことに満足感があふれていた。

考えてみると、歌もダメ、アピールも足りない、審査員を引き付けびっくりさせるものがなかったのであろう。がまの油売り口上も考えてみれば、観客をどうしたら引き付けられるかだと思う。今は、ただ口上を覚えたばかりだが、口上を述べるだけでは面白くない。人目を引くにはどうすればよいか、これからの課題である。これから先輩を見習い、勉強していきたいと考えている。

（小町塾　松葉富雄）

**会費納入はお済ですか？**

未納の方は会費の振り込みをお願いします。

年会費　二、〇〇〇円

ゆうちょ銀行

口座番号　10690-38833081

口座名　筑波山がまの油売り口上研究会

# 第二の人生健康で趣味悠々

小町塾　村野　茂

第二の人生を健康で、気力盛ん、己の欲する道を進んでいきたいとは誰もが思っています。「人生六十歳から」とも言われております昨今、退職後の人生設計の第一は健康であればこそではないでしょうか。日々健康に心掛けることで趣味も充実してくるものだと思います。

過ぎし日を振り返ってみますと六十代は主に体力維持や脳の活性化を促すものを中心にストレッチ体操・水泳・太極拳や民謡・詩吟等でした。現在は、がま口上・菊栽培・草履つくり等で健康で充実した日々を過ごしております。

現在、新しい課題に取り組んでいるのがご承知「がまの油売り口上」です。そもそも入会のきっかけは、講座でがまの油の製法や歴史などの講義と実技指導を受けて興味がわき入会した次第です。最初に台詞を暗記することですがこれが大変、せっかく覚えたと思ったら次回は忘れてしまったりして、良い方法はないかと考えた結果散歩中に唱えるのが良策と現在実行中です。家で大声を出して練習すると近所から「いよいよ認知症かな」と心配をかけられるきらいがありますが、野外なら大声を出せます。幸い近くの小川の土手で誰はばかることなく大声を出して練習が出来、体力づくりと一挙両得です。現在、どうやら口上は唱えることが出来たが、メリハリをつけ、せりふに合わせて身振りや手振りなどを加え、小道具などを使って多くの人々に注意をひく技法はこれからの課題です。まだまだ学ぶところが多く、一人前の口上師になりたいと願っているところです。

菊つくりは、現職の頃からで、当時花いっぱい運動を学校全体で取り上げ、六年生は一人一鉢菊栽培をすることになり、近所に菊の大家の指導を受けて一緒に育てたのが始まりです。すでに二十年過ぎましたが、まだ納得のできる菊が栽培できません。

菊栽培はまず冬至芽を管理し春にさし芽をして苗づくりから始まり、梅雨時には病気対策。猛暑の日は如雨露を使っての散水活動等。成長に合わせて摘芯や三本仕立ても大仕事。また生育状況を見て肥料や殺虫・殺菌剤を散布する等、細心の注意を払って育てた菊に、やがて蕾が膨らみ、天・地・人と大きな花が咲いたときは感無量です。

「菊づくり菊見るときは影の人」

次に最近始めたものに「草履作り」があります。第二次世界大戦末期小学生のころ、物資不足で祖父が夜なべして作ってくれた藁草履を履いて学校へ通った覚えがあります。今では隔世の感が致します。

括り台を使って、模様を考えたり、大きさや形などを考えて編んでいくと自然に手指に力が入り、指の運動と老化防止になるのではないかと思います。併せて押入れの中にあるいらなくなった布切れの処分ができて一石二鳥。この布草履を上履きにして履いているがとても爽快で健康的です。

少子化・高齢化が叫ばれて来た今日、社会の一員としていつまでも健やかに生活したいという希望は多くの高齢者の方々が持つ切実な願いであると思います。これからも、体に気を付け、健康な限りこの趣味を生かした人生を続けていくつもりです。趣味や特技に生きる者は老化がしないで若いという。

私もそうありたい。

# 忘年会旅行初参加の記

昨年十一月二十九日八時に新治支所からホテルおおるりのバスで、林会長以下総勢二十三名が鬼怒川温泉へ出発。私の隣の席は、海浜公園で言葉を交わしたことのあるつくばね会の成田大先輩。ホテルへ着くまで、口上というよりグローバルな状況談義で有意義な時間を過ごさせていただいた。

ホテルに到着後の部屋割りで私の部屋はつくばね会の萩原さん、碓井さん、それに同じ水戸教室同期の中村さん。宴会までの間、約三時間は大先輩のお二人から口上に関することを含めた、とても参考になるお話を伺うことが出来た。

さて入浴後はメーンイベントの大宴会。会場はかなり広めであったが、それを感じさせない盛り上がりで、あっという間に約二時間の予定時間を終了。↙

↙ここでの先輩方との会話は、貴重なアドバイス、ヒントを頂く有難い場であったと感謝している。

その後は幹事長の部屋で二次会を開始。殆どの方が参加されていることから、自己紹介の場が左回りに設定された。これは途中で雲散霧消して、多分私の番までは回ってこないだろうと思っていたが、ちゃんと回ってきたのには驚き。

二次会の後は居残った六名で三次会。どういう訳か私もそのメンバーに。ここでも殆どは口上の話。誠に有難いお話を聴くことが出来たと思う。終わって寝たのは一時ちょっと前。

充実した一日が終わって翌日は二日酔いの中、人情時代劇が見られない等の予定変更はあったが、ホテルのバスで十六時頃に新治支所へ無事帰還。途中下妻の大宝神社へ立ち寄ったので、名物の厄除け団子を購入。これで今回の旅行は万々歳と思っていたが、バスの中で『かわら版』の記事を書きなさいとのご指名。トホホと思いつつ、参考にすべくホームページ『かわら版』の忘年会記事を検索。なかなか出てこないので、他の記事もついでに拝見。結局は全版を読破することに。大いに勉強させて頂いた。

今回の忘年会の私の総括は次の通り。

一、会話が出来た人(水戸を除く)十七名中九名。全員の名前と顔は記憶。

二、口上に関する拝聴・会話の合計時間、約五時間。

三、忘年会旅行は勉強会旅行であった。

来年も又、是非参加したいと思います。尚、私は昨年九月に海浜公園デビューをさせていただきましたが、まだまだ未熟であることをこの旅行で痛感しましたので、これに伴う課題解決に向けて日々精進を重ねていきたいと思います。

（水戸教室　尾形　志次男）

## がまの油売り口上と出会って

平成二十四年の七月から十一月に十回の講座が那珂中央公民館で開講された。講師は「筑波山がまの油売り口上研究会」世話人清水泰清先生。受講生は十名。現在筆者は、セカンドライフ向上の為、詩吟(霞朗詠会師範)と居合道（夢想神伝流六段錬士）の稽古を続けている。しかし、古希を過ぎた現在、心に空虚さが感じられるようになってきた。新たな世界を探していた時にこの講座に出会った。

十回の講座を終了し、平成二十五年一月に水戸教室の門を叩いた。口上が覚えられない、野次られると頭が真っ白になり次の口上が出てこない、などいろいろ問題が出てきたが、毎回の練習で先生・先輩たちからの指導を受け、同年十二月一日、晴れてカミスガ祭でデビューすることができた。その後、海浜公園やフラワーパークの会場で数回実演できた。後期高齢になって新世界にデビューできたことに感動した。お客との交流、道具類の製作・購入など新たな楽しみが発見できた。生涯現役大道芸を見据えて、これからも精進していきますので、会員の皆様よろしくご指導お願いいたします。

（水戸教室　高橋　昌也）

夢想神伝流六段の雄姿

### 編集後記

創刊号を達筆でしたためられた宇野昭氏からバトンを受け取り、未熟なりに「かわら版」を発刊してきました。三十号を印刷し終えて小さく安堵しています。

大切な原稿に、紙面の都合と詫びながら字数を削ったり、勝手なイラストくわえたり…。投稿者の皆様には、この場でお詫びいたします。次の方にバトンを渡すまで、あとしばらく、読みやすい紙面になるよう頑張ります。

詩・短歌・日常の雑感、伝えたい出来事など原稿用紙一～二枚程度の字数を目安にお寄せいただけると嬉しいです。

編集子

**メールでの投稿大歓迎！**

アドレス

tgod6474@i-next.ne.jp

担当：田神　あて